夜光杯

浜田　道雄

四〇年ほど前仕事でイスラマバードに行くことが多かった。そんな何回目かの訪問のとき休日を利用してタキシラの遺跡を訪れた。二世紀半ばにクシャン朝のカニシカ王が君臨した都であり、法顕や玄奘など中国の西域求法僧が訪れたこともある仏教遺跡である。

その帰りアフガンとの国境カイバル峠に近いペシャワールまで足を伸ばした。ここはパキスタン西北部の交通の要地であり、西域各地からの様々な品物と多くの人々が集う賑やかな街である。

その街の市場を訪れたときのこと。とある店で半透明の暗緑色の石でできた小ぶりの酒杯が私の眼を引いた。杯の濃く深みのある緑色がどこか遠い砂漠のオアシスに生える樹々の緑を思わせ、「絹の道」への憧れを感じさせたのである。店の主人に聞くと、この地のオニキスで作ったものだという。ここは西域の交易の拠点。ならば、これはあの唐の詩人達が詠った「夜光杯」ではないのか？　私はすぐにその杯を買うことにした。

「夜光杯」は唐代西域への戦いに向かい、あるいは旅した人々が友人との別離の宴で酒を酌み交わした杯である。盛唐の詩人王翰の「涼州詞」が頭に浮かぶ。

葡萄美酒夜光杯　欲飲琵琶馬上催
酔臥沙場君莫笑　古来征戦幾人回

ワインはジョージア、イランなど西域の国々ではかなり古くから飲まれていた酒だから、唐代には東西交易のため「絹の道」を行き来したラクダの背に積まれて運ばれてきていたのであろう。

同じころ、王維もまた西域に旅する友人元二を送って詠っている。

渭城朝雨浥軽塵　客舎青青柳色新
勧君更尽一杯酒　西出陽関無故人

この王維が友と飲み交わした酒もワインだったのかもしれない。そう思うと、私もまたこの杯で酒を

飲みたいと思った。故国を離れて暮らすわが身を、遠く西域へ旅した人々の心になぞらえてみたかったのである。

しかし、私の期待はあっさりと裏切られた。バンコクに帰ってこの杯にワインを注いだところ、ワインは一瞬のうちに黒く変色し、香りも失せてしまったのだ。

あとで知ったことだが、唐詩の「夜光杯」はホータンあるいは甘粛省の酒泉で作られたものだが、パキスタンのオニキスはそれらに比べて石灰分を多く含んでいて、それがワインを酸化させてしまったのだろう。

以来この杯を手にしたことはない。家の飾り戸棚の隅にひっそりと眠っている。だが、なにかの折にこの杯に眼が止まるとき、私の心にはあの「絹の道」への憧れが沸々と蘇ってくるのだ。

（注）写真は中国最西端で作られているワイン「楼蘭」Loulan　１９９７。中国の回族ウイグル自治区トルファンから１００キロほど離れたところにある鄯善葡萄酒庁で作られている。